

第40回 オールディーズ歌謡の開拓 ブルコメ井上忠夫の功績

フィンガー5の絶頂期は、短いものでした。

昭和48年8月発売の『個人授業』から『バンブ天国』まで、全盛期とされる約1年半の間に7枚のシングル盤がフィリップス・レコードから発売されましたが（企画物を除く）、A面担当の作曲者は、都倉俊一が3曲、井上忠夫（のち、大輔）が4曲という内訳でした。

フィンガー5が「和製ジャクソン5」をめざしていたことは、彼らのファーストアルバム（A面6曲すべてがジャクソン5関連作品だったことからもわかります。歌でも踊りでも楽しませる垢抜けたグループへの変身、小学生リードボーカル・晃君の圧倒的な歌唱力、そしてそのハイトーンの魅力を最大限に引き出した洋風学園ソングが、彼らを希代のキッズ・グループへと導いた理由でしょう。

しかし、残念にも5枚目の『恋の大予言』発売の頃には、余人を持って代えがたい晃君のハイトーンの寿

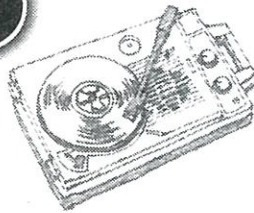
命は尽きかけていました。

実は当初『恋の大予言』はB面予定の曲だったのですが、発売前に急

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦



きよA面予定だった『上級生』とさしかえられています。『上級生』は、『個人授業』と並ぶフィンガー5の最高傑作と私が評価している作品ですが、彼らがこの曲を披露している映像を見たことはありません。おそらく晃君の声帯が録音時からさらに変化し、『上級生』の高音を出せなくなってしまったからではないかと推察します。

すでに前作の『恋のアメリカン・フットボール』の段階で、フルバンドによる伴奏のキーが一首下げられている映像が残っていますが、フィンガー5のピークは、晃君が変声期を迎えるまでの短く限定された期間だったからこそ、そのはかなさゆえに、いっそう輝きを増して記憶に残

っているのかもしれない。

さて、元ブルー・コマッツの井上忠夫が提供した作品には共通項がありました。どこかで聞いたような少し以前の洋楽サウンドをイントロ部分に持ってきて、大人にもアピールするといったものです。『恋のダイヤル6700』は、ウィルソン・ピケットの『ダンス天国』から（日本ではウォーカー・ブラザース盤でヒット）、『学園天国』は、ゲイリー・U・S・ボンズの『ニュー・オーリンズ』やレイ・チャールズの『ホワッド・アイ・セイ』をヒントに、前述の『上級生』はロネッツの『恋しているかしら』から、『バンブ天国』のサビの部分にはビートルズの『ヘルプ!』のコード進行が使われているという具合です。

その手法は、昭和49年7月発売の弾ともや（現・生沢佑二）のデビュー曲『土曜の午後のロックン・ロール』や昭和50年のあいぎき進也によるオールディーズ歌謡『恋のリクエスト』（チェッカーズ『涙のリクエスト』の原型）、『恋のペンダント』（ルベッツの『シュガー・ベイビー・ラブ』でも聞かれ、やがて昭和55年、シャネルズの和製ドゥワップ『ランナウェイ』で大きく花を咲かせました。